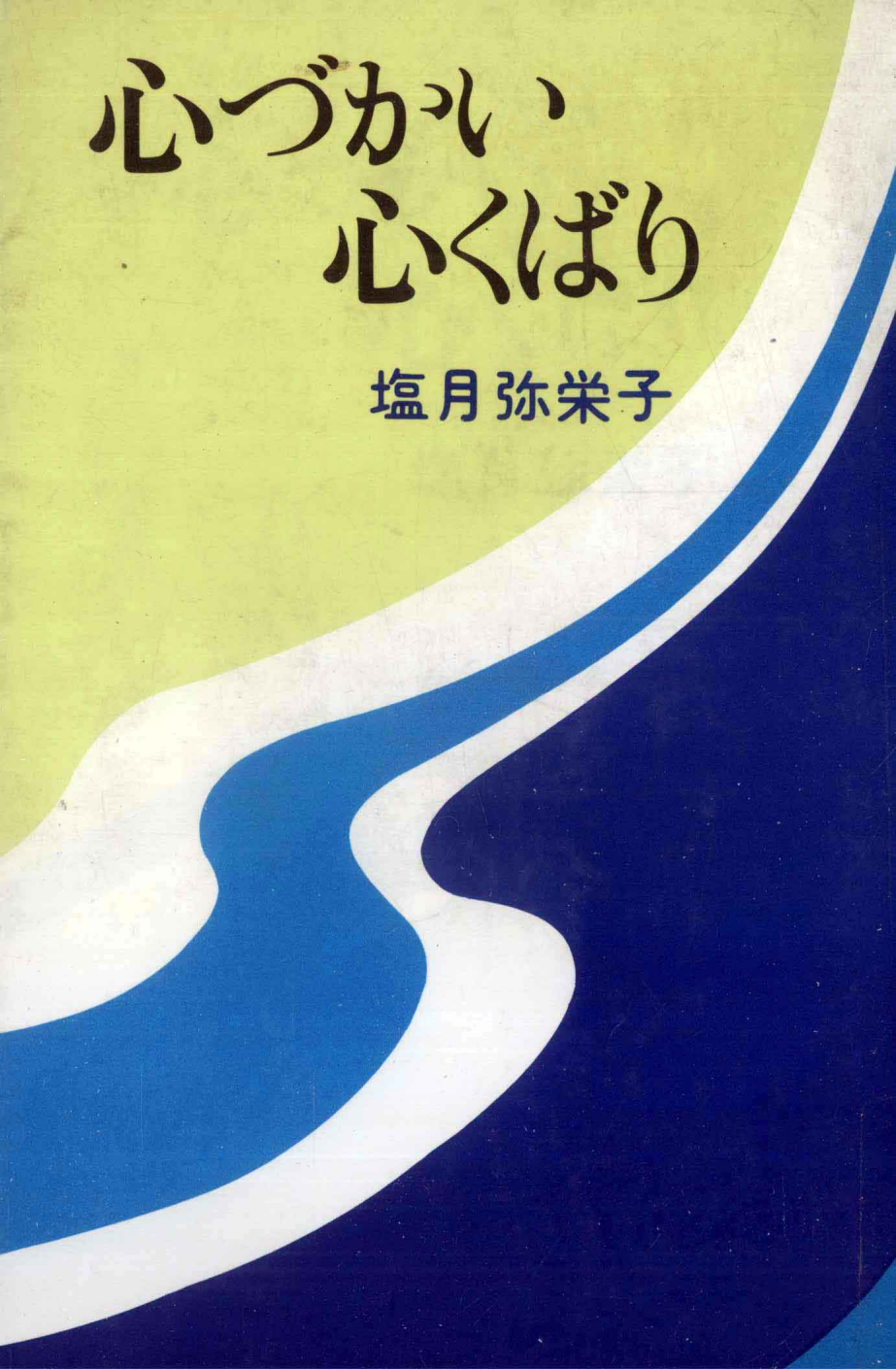


心づかる、 心くばり

塩月弥栄子



心づかい 心くばり

塩月弥栄子



文化出版局

心づかい心くばり

定価*七八〇円

昭和五〇年七月一日*第一刷発行

著者*塩月弥栄子

発行者*大沼 淳

発行所*文化出版局

東京都渋谷区代々木三の二の一

郵便番号*一五一

電話*(〇三)三七〇一三一(代表)

振替*東京一九五六七〇番

印刷所*カバ―・表紙*文化カラー印刷

本文*堀内印刷所

製本所*明泉堂

目次

第一章 ひかり

父からの電話 9

わが母のおしえ 19

お茶のたしなみ——入門の方へ 24

お茶に想う 27

お茶の稽古 31

茶室のひるね 35

一滴のかおり 41

「女らしき」ということ 45

女の幸せ 50

心のおしゃれ 55

心のささえ 58

乏しさと豊かさと 62

挨拶ことば 66

この一瞬をほのぼのと 71

第二章 かおり

結びやなぎ 77

扇 80

こぼれ梅 83

菜の花供養 87

音 90

春はなびらの 96

「侘び」と「やつし」 99

祇園 102

花もちりテッ
トン

105

今日庵初見

108

露をうつ

114

朝顔の茶

117

一本の野菊

119

草のなごり

122

炉

125

秋ざれの山居にて

129

けずり花

134

第三章 ゆとり

すわりなおして

141

茶の湯とジーンズ

145

たちいふるまい

のりおりの口伝

148

くつとりばなし

163

きものはなし

167

着付けのコツ 176

きものだより——娘から母へ

182

楽しい雰囲気で食事を 189

ささとたおやめ 192

日本料理のマナー 198

箸のあげおろし 204

珠光餅 212

修練と機転 215

道具をあつかう心 219

床の間 223

掛物 226

下座行 229

セツチン 232

宗教的な儀礼 235

贈りものをするとき 238

冠婚葬祭の花 241

あとがき 246

心づかい心くばり

装丁

装画

川崎春彦

第一章 ひかり



父からの電話

私の父、裏千家先代の家元淡々斎が、北海道阿寒湖の畔りで急逝したのは昭和三十九年九月七日の昼のこと、七十一歳でした。それはちょうど月曜日で、私がレギュラー出演していたNHKテレビのクイズ番組「私の秘密」の生放送の日で、私は涙をこらえて出演したのです。まだ父の死は、世間に公表されてはいませんが、内々もう知っていた方は、あるいは心ないと思われたかもしれません。しかし、生前父はどんなにこの番組を愛し、楽しんでいてくれたことか。そのなつかしい日々を思い、遠く北海道から、特別のはからいで京都の自宅へ運ばれた父のなきがらのほうを心で拝みながら、せいっぱいお手向けの心をこめてつとめたあの夕べのことは、おそらく一生の間、忘れられぬ思い出となることでしょう。

父は「私の秘密」の熱心なファンでした。ときどき電話をかけてきて、「どうもこんどはこん

な問題が出そうやなア」とヒントを与えてくれたこともしばしばです。そして番組が終わると「今晚はええ調子やったぞ」とか、「さっぱりあきまへなんだな」とか、電話で批評してくれますよ。よほどのことのないかぎりは、父も母もこの番組だけは欠かさなかったようで、私も毎週ブラウン管を通して、両親に元氣な顔を見てもらえると思うと張り合いがあったのでした。

この番組にはクイズのあとに必ずゲストの「ご対面」というのがありました。それは本人もすっかり忘れているような遠い昔、何かのご縁で袖触れあった人を探してきて対面させ、その人を出し出させるという趣向ですが、あるとき父がゲストになって、ご対面をしたことがあります。

それは父がまだ二十代のころの話でした。神戸へ向かう途中、京都駅で、いま発車しようとする汽車にあわてて飛び乗ったのはいいのですが、片方の草履をホームとタラップのすき間から下に落としてしまいました。するとその瞬間、ホームに立っていた妙齡のご婦人が、さっと自分の草履を脱ぐが早いか、走りだした列車にかけより、左右そろえて素早く「これをどうぞ」と、父の手に差し出したのです。それを受けとった父は「ありがとう」と、残る片方の自分の草履を、もうすっかり速度を増していた列車からポイと脱ぎ捨てました。はだしになったお相手あいてにそろえてはいてもらうためでした。そのご婦人が渡してくださった女草履は、幸い鼻緒の色が白っぽかったので、男がはいてもべつに不自然ではなかったということです。

とっさの機転と親切、そしてそれに応える臨機^{しんき}の処置の話柄に、折りにふれて父はよく私たち

五人の子どもにこの話をきかせていました。

その日のご対面には、この草履の主が五十年ぶりて父の前にあらわれたのです。その方はいまは東京で旅館のおかみさんにおさまっていられるとか伺いました。

古いお弟子さんたち、お年寄りの方からきくところでは、若いときの父は面長で、なかなか美男だったそうです。それと同時に、いかにも京都のぼんぼんらしく気が早く、かんしゃくもちだったという話ですが、それがだんだんに練れて、五十歳を越してからは人に怒った顔を見せたことがなかったといわれています。それも修養からでなく、自然にふるまっていたいながらそうなったところに父の偉さを感じると、父を知る方からよくきかれます。しかし、最後までせっかちな性分はなおらなかったとみえて、どこかへ出かけるときなど、「汽車はまだ大丈夫ですよ」と、まわりの人がいくらいっても、「乗りおくれたらいかん」と、早々に出かけて、いつもホームに二十分か三十分は立ちんぼしてないと気がすまないタチでした。

いつかこのことを父に話したら、「弥栄子や、そりゃせっかちやない。ワシのために見送りにくる弟子たちに失礼のないよう、ゆとりをもたせる配慮があるんや」と逆にきびしくお説教をされてしまいました。

お茶のほうにはたしかに「刻限は早目に」という教えがあります。が、それにしても娘の私としては、父が最後までせっかちのおかげか、わが家にも帰りつかずに、阿寒湖の畔りであわただ

しくあの世に旅出ってしまったかと思うと、父らしいなあと皮肉にも、おかしくもあり、どうにもたまらなく悲しい思いがいたします。

七月の二十四日は父の誕生日でした。例年ならば箱根に家族一同が集まってお祝いをしていましたが、亡くなった年は、京都に集まることになっていました。ところが当日、私ども夫婦はよんどころない用事でどうしてもからだがあかず、翌二十五日の夕方になってやっとかけつけました。家にまいりますと、家族は全員若狭の高浜にいて、どういうわけか父だけがひとりぼつりと残っていました。そのとき、父の様子がひどく疲れているように見えてハッと思いました。塩月は医者のカンでなにかを感じたらしく、

「こんど東京にこられたときは、ぜひうちのクリニックで精密検査をいたしましょう」

と申しました。しかし父は、

「いやあ、どこも悪いとこなんかあらへん」

と、例の調子で明るく答えていました。なぜあのとき、もっと強く無理やりにも検査を受けられることをすすめなかったのか——と、塩月はあとで泣いて悔やんでいました。

二十七日の早朝、私どもが東京にもどるとき、玄関まで見送りに出てくれた父にいつものように「さよなら」と握手をしたのですが、どうしてか父はそれだけでは気がすまならしく、もう一度しっかりと私の手を握りしめたうえで、つと頬をよせて、ほおずりまでしてくれました。思

えば小さいころよくしてもらったホッペ……これが私と父との最後の別れになってしまいました。父のお誕生祝いのプレゼントといえは、こんな思い出があります。私ども夫婦が以前アメリカへ旅行したとき、ちょうど父の誕生日を迎えたので、バスデイ・カードを買って送りました。

あちらのこの種のカードにはユーモアといえますか、冗談めかしたものがとても多いのです。父にあてたカードも、ファミリー・バンク・オブ・アメリカ（アメリカ家族銀行）なんてありません。銀行名の小切手になっており、「あなたへのラブは百万ドルにも値します」と書き添えてあるのです。それに三六〇ドルなんてもっともらしい金額が書きこまれていました。

あとできくと、このいたずらカードを受けとった父は、本ものの小切手と思いこんで、たいへんな喜びよう。家のものに早速、銀行にいれるように言いつけ、「海外旅行で金があるやろうに、こんなにたくさんよう送ってきよったな」とごきげんだったそうです。

アメリカの私どもの宿にもわざわざ長距離電話がかかり、「ありがとう、ありがとう、サンキユー」とあまりにもうれしそうな父の声に、とうとう私どもは「あれは冗談です」ともいえませんでした。

また、お弟子さんたちのあいだでも「家元のけっこう」といえば有名で、お茶会などに招かれると、そこでの見るもの、聞くもの、食べるもののすべてが「けっこう」なのです。それも口先だけで言っているのではなくて、感嘆のため息を大きくつきながら、心の底からふき出るような

調子で「ほんまに、けっこうやな」「ああ、けっこう」「こんなけっこうなもん、生まれてはじめてや」

くどいほめことばをいわなくても、素直な感動をこめた「けっこう」の連続なのですが、それがどれほど相手を喜ばせ、励ますかを父はよく知っていたのではなからうかと、ふと思うことがあります。

父はお稽古のため、日本じゅうあらゆる土地へ出かけましたが、ゆく先さきで「これを宗匠に」といって、地方の名産など出されると、「おいしいな、おいしいな」とよくいただいたようです。北陸の旅では「宗匠がお好きだから」と、カニを山ほど出されて、これにはさすがにまいってしまい、付き添いの弟子に助けをもとめたという笑い話もきました。

そして、ご馳走になったものをよくおぼえていて、その方が見えると「この間いただいたあれはとてもおいしかった」と、心からの感動をこめて礼をいうのです。あいそうがよいとか、おべっかをいうのではなく、人の好意を素直に受けとり、心が余ってことばになるというのだったようです。

ほんとうに、単純で素直で純粹で、いつまでもみどりごのみずみずしい心を失わぬ父でした。芝居や映画、テレビなどを見ていても、まるで小さい子どものようにスーッとすぐそのなかにとけこんでしまします。